



「日本文化創出を考える」研究会
2017 年度報告書

公益財団法人国際高等研究所

「日本文化創出を考える」研究会

「日本文化創出を考える」研究会
2017 年度報告書

目次

序章 研究会の目的.....	1
1. 日本文化の中心としての京都.....	1
2. 文化と研究開発・産業との融合を目指して.....	1
3. 戦後の経済発展を通して置き去りにされた文化.....	2
4. 進歩史観を超えて.....	4
5. まとめの方向性.....	4
第1章 生活活動に結び付く日本の文化.....	6
1. 虫の音にも敏感で擬音語や擬声語の多い日本文化.....	7
2. コミュニティ社会が支える文化.....	7
3. 生活必需品の品質.....	8
4. 識字率の高さによる文字情報の普及を通じた音楽の発展.....	8
5. 生活から得る第六感と無分別智.....	9
第2章 新しい日本の文化創出に向けて.....	10
1. 日本文化とは何か.....	11
2. サブカルチャー.....	11
3. 数百年先の文化創出も視野に入れて.....	12
4. 求められる神社仏閣の保有する資産の棚卸.....	12
第3章 事例研究.....	14
1. 伝統工芸に根本を持つ京都発のグローバル企業.....	14
2. 伝統技術と先端技術の融合.....	15
3. 日本で一番古い楽器としての梵鐘.....	16
第4章 日本文化の発信.....	18
1. サブカルチャーの海外進出と日本文化の発信.....	18
2. 日本人自身に向けた日本文化の発信.....	18
3. 京都の文化・芸術に関するデジタルアーカイブ化と世界への発信.....	18
4. 求められる伝統文化、伝統技術を基盤とした第二創業.....	19
5. 伝統技術コーディネーター.....	19
6. 職人の育成.....	20
7. 日本文化の教育と国際学校の招致.....	20
8. 修復技術の蓄積と体系化.....	21
第5章 日本文化創出のための京都のあるべき姿を考える.....	22
1. 街そのものが資源循環の究極のコミュニティ社会.....	22
2. 感情を鎮静化させる味わいの深さが醸し出す価値の訴求.....	23
3. ポップカルチャーの取り込み.....	23
4. 世代を超えて受け継ぐ工夫.....	24
終章 「先端的学術・文化・芸術都市宣言」を目指して.....	25

1.	「思想、概念、コンセプト」から伝統文化を捉える.....	26
2.	「暗黙知、技、モノ」から伝統文化を捉える.....	26
3.	研究のアプローチの一例 —文化による音と音楽の違い—.....	26
4.	研究のアプローチの一例 —着物と和服文化—.....	27
5.	ポスト近代化の時代に向けて	28
	研究会開催経過.....	31
	研究会メンバー.....	32

序章 研究会の目的

1. 日本文化の中心としての京都

明治時代の東京遷都以降、東京が政治首都となったのに対し、京都はしばしば文化首都と呼ばれる。明治時代の日本には文化以外に誇れる産業はなかった。事実、1867年のパリ万博、1873年のウィーン万博、1876年のフィラデルフィア万博に日本が出品したのはすべて、巧みな超絶技巧ぶりを称えられた美術工芸品であり、その作者の多くは、錦光山宗兵衛（京焼）、正阿弥勝義（彫金師）、高瀬好山、並川靖之（京七宝）といった京都の職人・芸術家たちだった。当時の明治政府は、日本の顔が文化であること、そして文化が京都から生まれることを意識せざるをえなかった。

そもそも京都の域内には、伝統工芸に必要な良質の材料はほとんど存在しない。いろいろな産業があるが、材料はほとんど外から持ってきたものばかりである。しかし京都には、外から持ってきた材料を最も適した比率で調合し、優れた工芸品に仕上げる高度な技術が蓄積されてきた。焼物に適したまともな土は聚楽土しかない。有田や瀬戸のほうがはるかにいい土がある。京都域内にあるのは材料ではなく技術だけである。その技術を学ぶために、例えば有田の窯元の息子が留学してくる。そこで勉強した技術を京都から持ち帰る。地元にはよい土があるが、技術を習得するために京都に内地留学する。柿右衛門の赤などもじつは京都で生まれた技術である。京都という狭いエリアで何百年にもわたって技術を追求してきた歴史とそこから生み出された暗黙知がある。その蓄積が功を奏し、エレクトロニクス全盛になった1960年頃においても、時代の要求スペックに合うようなプロダクトを京都では製作できた。伊勢神宮の20年ごとの遷宮に際して、社殿を建て替えるだけでなく、あらゆる道具を全部作り変えるが、その技術のかなりの部分は京都で培われたものである。

京都の伝統産業ではまず材料の選び抜きが行われる。どの材料を使うべきかを定めるのにものすごく時間をかける。次いで、それを最もよい状態で使うための手続きをきっちりと確立する。これは別に文章化されてはいないが、一人一人の職人がそれを分かっ

た上で仕事をしている。

京都には、美しい文化をことさら愛する公家がいる。彼らは美しいモノ、精緻なモノなら、いくら高くても買ってくれた。公家は日本では、イタリア・ルネサンスのメディチ家に相当するようなパトロンであり、彼らがいなければ日本の文化は育たなかった。手をかけてよい物を作ればかならず売れる。今日というブランドと同じで、大量生産廉価販売ではなく、少量生産で高い品質保証がなされていたのである。

三島由紀夫によれば、日本文化には「たおやめぶり」と「ますらおぶり」の二つの系譜がある。源頼朝が京都を嫌い鎌倉に都に幕府を置いたのは、日本文化を「たおやめぶり」から「ますらおぶり」に転換させようとしたのだと見ることができる。しかし足利尊氏はふたたび幕府を京都に戻し、結局のところ日本文化の主流となったのは、京都風の「たおやめぶり」の文化であり、それを支えたのは公家と宮中の女性たちだった。

平安時代から江戸時代まで、公家と女性たちは京都で一種のサロンをつくっていた。サロンこそは京都文化を生む母体だった。今日、公家はもはやいない。では、公家がいなくなるとともに、サロンも失われてしまったのか。そうではない。形は変わったが、女性たちは今でもママ友や女子会といった今風の小さなサロンをもっている。彼らは服装のみならず、生活をも美化しようとしている。今日、京都市文化を新たに再生させようのは、サロンを持つ女性たち、学内外での活動をする学生たちである。彼らのもつ美意識を再評価する必要がある。

だからこそ、京都は世界中のあこがれの地になった。日本文化創出について考えようとするれば、京都の持つ文化・芸術力を抜きには語れない。従って、この報告書では京都を中心に議論をしていくことにする。

2. 文化と研究開発・産業との融合を目指して

「けいはんな学研都市」の正式名称は「関西文化学術研究都市」という。今では130を超える研究

開発企業等がここに研究開発部門を設置している。筑波研究学園都市の関西版を考えて作られた都市であるが、筑波では国立の研究所が多くを占めているのに対して、けいはんな学研都市では民間企業が大多数で、国立機関としては国立国会図書館がある程度である。京都府などの行政はここを先進都市とし、これからの産業を活性化していくための創意工夫の場としていきたいと考え、さまざまな施策を講じている。

けいはんな学研都市を作る際、設立委員会のリーダーの一人となったのが梅棹忠夫だった。彼は、「学術研究都市というだけではダメで、文化学術研究の都市にしなければいけない」と主張した。そこで梅棹案をもとに、「関西文化学術研究都市」という正式名称になったが、実際のところ、文化のことはほとんどなされていない。唯一、国際高等研究所が文化的な活動をしているにすぎない。2021年には文化庁が京都に移転することもあり、もっと文化面で積極的な活動をして、文化活動が産業界を活性化させ、研究開発のヒントを与えられるようになれば良い。たとえば京都の伝統産業が有する伝統技術が現代の最先端の産業の技術に活かされることもあるだろう。けいはんな学研都市が今以上に注目されるためには、「文化」にしっかり向き合い、取り組むことが必要である。教育も含めて、文化活動と、例えば学者の深い知識と経験を組み合わせる形で、他の場所にはないモノを生み出すことができれば、その情報をキャッチして世界中の若者が興味を示してくれる可能性は大いにあるだろう。

学研都市の北側にある京田辺市の普賢寺は、京都府に立地しているものの、元々は奈良文化圏である。平城京の関係で出来たお寺であって、日本最古の十一面観音像がある。田辺市の竹は三月堂のお水とりにも使われている。このように、奈良と京都を結ぶ所にけいはんな学研都市がある。そういった視点で「けいはんな」という場所を考えた時に、奈良にも行けるという意味では、京都から微妙に距離があって京都を少し遠い距離から見ることで、奈良も京都も両方見ることが出来て、両方からの良い影響を受けることが出来る地の利がある。

新たな都市を形成していく場合に参考となるモデルに琳派の光悦村がある。琳派は徳川家康によって全く何もない所へ移されたが、そこに新しい文化の土壌を作った。それが鷹峯の光悦村である。光悦は自分で手勢の工芸職人を引き連れて新しい村を開くが、それがいわば江戸という大消費地に物を送り出す役割を果たした。文化は多くの場合、都会の中で生まれる。歌舞伎とか猿楽は、はじめはサブカルチャーであったが、それがやがてメインカルチャーになっていく。そういうものが一方にあり、他方で当時の京都の中心が御所から三条ぐらいまでだとすると、光悦村のあった鷹峯はものすごい田舎であって、そんな田舎に文化が生まれた。このような事例からも、けいはんな学研都市のデメリットとされる立地条件を、文化をもってメリットに転換することは十分にあり得ることではないか。

3. 戦後の経済発展を通して置き去りにされた文化

確かに今の京都には、江戸時代・明治時代のような超絶技巧の工芸士はいない。だが、京都で培われた伝統工芸の伝統は形を変えて今日にいたるまで引き継がれ、京染物の染物からは通信用LSIのプリント技術（ローム）が、仏具の金属加工からは精密機器（島津製作所、オムロン）が、清水焼からはファインセラミックス（京セラ）が生まれ、「京都ブランド」とも呼ばれる京都独自の輝かしい産業が発展してきた。

京セラやオムロンらの現代の最先端の工業が京都の伝統工芸から生まれたこと、科学技術が文化から発展してきたことを知る人はあまりいない。だが、ここにこそ、今後の京都の産業の発展、日本の産業の発展を握る鍵があり、この点をもっと知れば、大学の文系の学問は不要だなどという暴論は払拭されるだろう。

日本を早く近代化させなければ日本は欧米の植民地になってしまうという強い危機感を持った明治政府は、富国強兵や殖産興業の旗印の下、産業の発展に力を注いだ。だが、そのとき明治政府は、産業の発展の基盤には実は文化があること、文化は文明の余剰物ではなく、文明の本質をなすこと、文化がなければ真の近代化はありえないこ

とを見落としていた。

富国強兵や殖産興業の政策がなければ、日本は日露戦争で勝利を掴むことはできなかった。だが、富国強兵のみで「文化」を忘れていたため、第二次大戦に突入してしまったというのも、これまた否みがたい事実である。そしてその姿勢は、第二次大戦後もほとんど変わることがなかった。戦争に敗けた日本はひたすら経済復興にのみ力を注ぎ、文化を後回しにしてしまった。

これを、日本と同じ敗戦国だったドイツと比べてみれば、その違いは歴然である。

日本とドイツは第二次大戦の敗戦の後、政治に関しての発言力を喪失してしまった。しかし戦後ドイツ人が復興を果たしていくために、経済のことは言ってもいいだろう。さらにドイツには立派な文化的伝統がある。ゲーテやベートーヴェンといった人たちが 20 世紀前半にいたなら、彼らは明らかに戦争に反対しただろう。ならば、そういう人たちのつくった文化のことについてなら言ってもいいだろう。そう戦後のドイツ政府は判断した。そこで、「ドイツは愚かな戦争によって諸外国との関係を傷つけてしまったが、ドイツには立派な文化的・学術的伝統がある」といって、自国は貧しいのに、外国人留学生を多数受け入れ、ドイツのイメージアップに努めた。つまりドイツの戦後復興では経済と文化がセットになっていた。他方、日本では経済一本槍だった。これが日本とドイツの戦後の出発点の大きな違いをなしており、今になってみると、ドイツのほうがより賢明だったことが分かる。

戦後の日本でも、「きれいなまちづくりを」と主張する学識者がいた。建設省の内部にもいた。それに対して建設省のお偉方たちは、「まちづくりなんてけしからんことを言う奴がいる」と発言していた。お偉方たちは、建設省は国民に住宅を供給することを一義的に考えればいいのであり、街並みなんていうことはまだ考えなくていい、と考えていた。ここに、日本とドイツの戦後政策の違いが端的に示されている。日本は経済が最優先で、文化のことは一番後回しだった。それに対してドイツは戦後の初期から経済復興と文化復興をセットにして捉えていた。それがそれぞれの国のま

ちづくりに端的に表れている。

おそらく戦後の日本政治は、文化がなくても人は生きていける、文化は付け足しだ、余剰だ、としか考えてこなかった。それは明らかな間違いである。文化に携わっているとき、なんらかの文化を創造しているとき、人間は生き生きとしている。文化は人間に自由を与えてくれる。小説を読んでいるだけでも、人はそこに描かれた情景を目の前に思い描くだろうが、それもまたささやかな文化の創造である。そういう文化創造力を国民ひとりひとりが持つことが大切で、文化創造力を持っていれば、心は豊かになる。文化が人に自由と幸福を与えてくれることを忘れてはならない。

日本は長い間、文化を軽視してきた。文化ばかりではない。学問も軽視してきた。国立大学は独立行政法人化されたが、それ以降、幾多の問題点が指摘されており、このままではわが国の学問の発展は大きく阻害されてしまうだろう。これからの日本をつくるには、政治、経済ばかりではなく、文化、芸術を無視してはならない。文化と科学技術、文化と産業の関係をどのように見ればいいのか、新しい視点を日本国民に提供することが期待されている。

戦後の日本とドイツの違いは、大学制度によるところも大きい。ポローニャ大学、パリ大学など、11~12 世紀にヨーロッパで創設された最も初期の大学は、法学部、医学部、神学部、哲学部の四学部からなり、この四学部システムは 19 世紀になるまで続いた。法学部、医学部、神学部が専門学部であったのに対し、哲学部は今日の教養部のような基礎課程をなし、法学部生、医学部生、神学部生らもみな最初は哲学部に入学し、広義での哲学ないしリベラル・アーツを学ばなければならなかった。さらに哲学部は専門学部をも兼ね、学生は教養課程修了後にさらに哲学を専門として学ぶこともできた。哲学部から今日の文学部、教育学部、経済学部、理学部、工学部などが生まれた。

こうしたヨーロッパの大学システムを支えていたのは、すべての学の根底には哲学がある、文化があるという思想だった。むしろドイツもその例

外ではない。ドイツはこの思想に馴染んでいたからこそ、大戦後、ゼロから国づくりをしなければならなくなったとき、まず自国が還るべき文化、還るべき学問、還るべき伝統を探り、それを基にして町の復興、経済の復興をなしとげようとしたのだった。

他方、そのような思想のなかった日本では、明治時代や昭和前期と同様、文化は付け足しだとか余剰だとか捉えられなかった。それは、日本における文学部の地位の低さに明確に表れている。日本で、ヨーロッパの大学における哲学部に相当するのは文学部であるが、文学部にはヨーロッパにおける哲学部のような基礎学の役割が与えられていない。日本における文化軽視、人文科学軽視の傾向は今日さらに強まってきている。

1872年の太政官布告 339号によって総理大臣伊藤博文は和服から洋服への転換を図り、日本は脱亜入欧への道を突き進んだ。和服を捨て去るとともに、日本は江戸時代まで続いてきた古い日本文化を捨て去り、殖産興業一本鎗になった。文化軽視の動きはじつはこの頃に始まっていると考えなければならない。

4. 進歩史観を超えて

これから50年、200年先のことを考えたら、これまでのような進歩史観を保つのは難しい。時代は定常経済社会へと向かいつつある。そのような時代では進歩史観とは異なる歴史観や世界観を持たざるを得ない。いずれ大量生産という生産方式は時代遅れになってしまうだろう。そういう新しい時代のなかで、京都の西陣等で行なわれているやり方は、見直される可能性が充分にある。

これからの時代について、一方には大量生産になるとほとんどロボットで仕事ができるようになってしまい、一人一人の職人の働きは大幅に価値が下がるだろうと予想する人たちがいる。他方、人口減少の結果、人々は高齢になっても働きつづけ、寿命が延びていくのかもしれないという予想もある。生きがいであるとか、働くことを通して街や社会に貢献することはとても重要なポイントで、そういうことと人間の活動は切っても切り離すことができない。そういうときに、自分なら

ではのモノ、他人にはできないモノにこだわるとか、お客さんと本当に一対一の関係にあるモノ、たとえば丁寧な縫製のモノを届けることにこだわるといった、大量生産の機械にできない部分、AIなどにはできない部分に、逆に価値観がシフトバックする時代、新たなより良い価値に転換されていく時代が到来するかもしれない。

世界全体のマーケットが有限になってしまったため、自動車産業もアメリカのグローバル産業もはや新しいマーケットを見つけることができず、これ以上成長出来なくなってしまっている。これからの時代は、コンパクトなサイズで定期的に動いていくマーケットを相手にした産業世界とならざるをえない。モノに関する新しいマーケットはほとんど残っておらず、もはやこれ以上成長できないため、アメリカが今やっているように金融で収益を上げるような方向に進まざるをえない。今は、何千兆円というお金が世界中を動き回る時代になっている。今後は、この有限のマーケットの中で健全に共生していくという性格が濃厚に出てくるようになるだろう。そういう時代になると、京都がこれまでやってきた産業や生活様式がグローバルな世界における一つの良いモデルになるかもしれない。従ってそういうものをうまくまとめて、将来に対して京都的な生活のあり方、産業のあり方が、これからの世界に役立つことを打ち出していくのが好ましい。

5. まとめの方向性

京都はもともと何よりも文化を重視する町だった。武力よりも繊細さを、有用性よりも美を、モノよりもコトを優先する空気が京都にはあり、そこから美しい庭、美しい陶磁器、美しい菓子が生まれた。

モノよりもコトを重視することは、作品そのものよりも、作品を生み出す過程を重視することであり、そのため京都では「継承」に重きが置かれた。文化は継承されてこそ文化でありうる。継承がなければ、文化は死に絶え、町は活気を失うであろうことを、京都の人々はよく知っていた。

今の時代は皆が満ち足りてしまって、昭和以降いわゆる先進国はこれ以上発展し得なくなってきた

ているが、新しい需要を創り出す源泉は文化にある。逆説的に言えば、文化を顕在化しないまま経済的な繁栄を求めてきたところに、文化に目を向ける一つの大きなチャンスがある。戦後いろいろな生産設備が壊され、食べていくことや経済が優先された結果、失われてしまった、あるいは表面に出てくる機会がなくなった文化にいま一度目を向け、そこに価値を見出す時代がもうそこまで来ているのではないか。

日本人が育んできた自然観、物事の捉え方と日本文化とはどういう関係にあるのか、いわゆる日本文化論も省くわけにはいかない。日本文化論については、京都文化論を抜きにして語ることはできない。モノの在り方、モノの存在意義、モノの提供価値として日本文化はコトを培ってきた。モノだけではなくてコト。その点にも触れながら、京都文化のよさを浮かび上がらせることにする。京都文化の独特なところを生かして、これから世界

に打って出ていけるような視点、観光産業の礎となるような視点、外国人が日本について考えていることに対して価値を与えるような視点。そうした視点から思想、概念、コンセプトをまとめる。他方、その具体例として、伝統技術、原材料、技の活かし方等々について具体的に調査し、事実関係をできるだけ豊富に集めてまとめていく。こういう二つの流れでまとめていくことにしたい。

京都が持っている伝統工芸技術等、種々のモノを文化力に結びつけ、出来ればそれを産業として発展させ、あるいは京都文化を世界中に発信して世界中から人を呼び込み、あるいは京都の持っている味や香りの文化を技術として世界が買ってくれるようにするなど、その実現のためにはどのような施策が必要かをまとめる。そしてそれを日本文化創出について実行すべきことの大枠として示し、来年度以降にその詳細の検討・具体化を行うというスタンスで全体を構成したい。

第1章 生活活動に結び付く日本の文化

今日、日本を訪問する外国人観光客の数が大幅に増えたが、彼らはみな口をそろえて、日本の駅やトイレはとてもきれいだという。なぜきれいなのか。おそらくそれは、生活は便利であるのみならず清潔で美しくなければならないという思いが日本文化の精神をなしてきたことと決して無縁ではない。

1. 虫の音にも敏感で擬音語や擬声語の多い日本文化

日本人は虫の音に対して外国人よりもはるかに敏感である。例えば長唄の「秋の色種」は麻布の辺の風景を歌ったものであるが、そこでは鈴虫と松虫と区別して三味線が弾き分けないとけない。虫の音を三味線で表現するというのは、要するに自然と一体化しながら、しかも総合的に捉えるということである。しかも三味線の音色を取り換える。虫によって、はじいたり、すくったり、それが重要とされている。

月に思いを託すのはヨーロッパにもあり、ちょっと思い出すだけで、シューマン、ドヴォルザーク、フォーレなどに月を題にした重要な声楽・器楽の曲があるが、虫を扱った例はルネサンスのいくつかの曲しか思いつかない。鳥については西洋でも多数の曲がルネサンスから 20 世紀までであるのに、虫の曲が少ないのは、虫に耳を傾けることが少なかったため、音楽の素材として使われなかったのかもしれない。全ての日本人というわけではないけれども、自然の中にちらっとした気配のような音も含めて、キャッチする能力のある人はとても多い。

高齢者を集めての音楽療法みたいなものがあり、そこではいろいろな国のいろいろな伝統楽器を持ち寄って皆で鳴らすということをやっている。やはりそれぞれの人に自分の好きな音が存在し、例えば低いボワーンという音が良いという人もいれば、キラキラキラという音でほっとするという人もいる。そこからは、その時の心の状態と繊細な音の聞き分けみたいなことが、日本の中でかなり大事にされていることが理解できる。

日本は外からのものをうまく受け入れてきた。その典型的なものとして漢語を受け入れて日本語化した。日本の音に合わせていく過程で随分と擬音語、擬声語が多くなった。つまりそれだけ文字がなかった時代の人たちは、周りの音といったものにすごく敏感で、その違いを言葉で表現しようとした時に擬音語、擬声語が生まれていく。そういう意味では古い時代の日本人は、音に対しての感性が良く、文字にない言葉にならないものを表現する能力が相当に高かった。パタパタとかカ

タカタとかザワザワといった擬音語の単語もしくは言葉が一番多いのは日本語であり、他の言語には殆どないものである。

あまりロジカルでなくて直観的な物の伝え方である擬音語、擬声語は分かりやすいし、その言葉のニュアンスを日本人たちは共有することが出来る。これからはインテグレーション、シンセシスの時代と言えるけれども、総合的であることが重要であり、分析して細々になった情報を集めるのではなくて、丸ごと情報として入れることが必要である。

心の状態を表すものも音から借りてきている。例えばガーンと言う。重いショックを受けている状態をガーンと言ったり、静まり返っている時の気持ちをシーンと表現したりするなど、自分の外にある音みたいなものを自分のその心理的な表現を伝える時にも転用してうまく使い、しかもそれがしっかりと共有出来ているということは、世界的に見てかなり珍しい。シーンとかガーンとかを英語で説明することはすごく難しく苦勞を伴う。「ガーンと書いてあるこれは何だ」と聞かれた時、うまく翻訳出来ないことが多い。

日本の音楽にももちろん楽譜があるが、例えば三味線を普段教える時には口頭伝承である。そういう時、ただラララというような言い方はしないで、音の高さも口で言わないで音色で伝える。三味線弾く時に、「この音だよ」という時に、「テンと弾きなさい」「ツンと弾きなさい」と言う。それは、高さは同じだが、2 の糸で押さえた音で弾くか、3 の糸の開放弦で弾くかというのを、ツンとテンで区別する。義太夫節においても、「おう、それはツンじゃなくテンだ」と言われる。しかもそれはシステム化されている。それを一般に唱歌（しょうが）と言う。伝承されている。今のオノマトペ的擬声語を使って音楽のシステムを説明する用語が決まっているのである。

2. コミュニティ社会が支える文化

現在、スターバックスのような珈琲のチェーン店もずいぶん広がっているが、それ以外に、京都中京の染屋さんのある地域に昔ながらの珈琲屋がある。その地域における染めというのは非常に細

かく分業化されていて、最後には上がってきたモノを最終チェックして修正するという悉皆屋さんまでも存在する。そのように生産の歩留まりをよくするための役割を担っている人たちが多くいる。その地域というのは、軒を連ねてそれぞれ分業の技を持っていて、風呂敷に包んで隣に持って行く。そして最後になったら製品になっている。その街の中に町家の珈琲屋がある。朝その所を通ると良い匂いがする。その店でないと味わえない味がある。そこを行きかう染め物に従事している人たちのための店。地域のものすごく小さなコミュニティ社会の中で、日本のお茶ではなくて珈琲で成立している。全く新しく入ってきたものだけれども、それを提供し、利用する人がいる。

中京の皆が集まる珈琲店というのはコミュニティの場、井戸端会議の場である。まさに染め物の地域で、非常に助け合いが重要である。流れ作業だから、どこかの工程でその担当なのにミスしたまま上にあげることも当然ある。それは、そのミスをした後段のプロセスで誰かが修正する。だから最後は歩留まりがものすごく良い。失敗が出ない支え合いのシステムが確立されているのである。

3. 生活必需品の品質

ティッシュペーパーやトイレットペーパーは、日本のモノが圧倒的に品質が良い。そのような生活必需品の品質にもこだわるのが日本人である。海外の人はティッシュペーパーや鼻紙を持っている方が珍しく、洋服の袖の辺で拭く、あるいはハンカチで鼻をかんで、またそれで手を拭く。それからすると日本はずいぶんと高級である。17世紀においても支倉常長率いる慶長遣欧使節団がローマに向かう途中、嵐に遭遇して南フランスのサン・トロペに避難した時のこと、一行が鼻をかんでポイと捨てた。それを現地の人たちが争って拾ったというサン・トロペ公爵夫人の記録、「彼らは、ほとんど掌の大きさほどの、中国の絹の鼻紙で洩(はな)をかみ、1枚の鼻紙は二度とは使いませんでした。洩をかむたびに地上に紙を捨てますので、見物に集まったこの地の人々が拾い集めるのを見て面白がっておりました。彼らは胸にたくさん紙をはさんでいましたが、長途の旅に充分なだけを持ってきていましたので、こんなことが

できたのです」、が南フランスのカルパントラ図書館に残っている。一行の鼻紙はローマでも珍しがられ、ローマのアンジェリカ博物館と人類学博物館に「支倉の鼻紙」として保管されている。

4. 識字率の高さによる文字情報の普及を通じた音楽の発展

明治に洋楽を導入した時には楽譜は来ても演奏する人は来ないし、外国人教師も数少ないことから、ほとんどのものが楽譜を基にして演奏されていた。もともと日本には楽譜を読む伝統があった。日本の譜面というのは古い。一番古いのは正倉院にある。700年代である。それから活字にした印刷楽譜は15世紀に高野山で声明の楽譜として出版された。三味線の楽譜ですら1664年あたりにもう京都で出版されている。そうすると論語を読むような感じでピアノのバイエルなどを読むことができる。識字率の高い国は西洋音楽の導入がうまくいった。それからいうと、中国、韓国、台湾、北朝鮮、香港、日本だけが未だに西洋音楽を一所懸命やっている国である。

洋楽が盛んなアジアは箸を使う国である。すなわち西の端はベトナムまでである。器用であって、字が読める国である。ただし字は誰かが翻訳するわけで、「ドレミファ」が「いろはに」になる。お箸を持つ文化は雅楽を持っているし、合奏も持っているし、文字も持っている。

識字ということでは、日本は識字率が非常に高く、工芸職人ですら、大福帳みたいなもの書き記す。自分が極めた忘備録のように、書くだけでなく、絵による説明も入れてある。こういう火の起こり方があって、そこにどれだけ入れておけばこんなモノが出来たと、克明に実験ノートみたいなものを書く。しかも字を知っているだけでなく、絵心がある。そこに書かれているのは市井の人だが、プロの漫画家顔負けに絵を描いている。それがまた伝承につながる。決して徹底的に教えこむということをしないで、自分の会得したものは「まさにこいつにだけは」という者にしか伝えない。ところが記録が残っているから、後世のものがそれを紐解いて考えながら、自分で試行錯誤しながら、また新しい境地を生み出して行く。ベースとなる基本はかなり共通している。

文楽において新しい演目が出るとテキストは印刷される。歌舞伎で長唄が歌われるとそれはすぐ印刷される。誰が歌ったということを書いて絵も入れたりする。ということは、いかに文字による情報に対して人々が飢えていたか、使っていたかということの良い証拠であるのではないか。

5. 生活から得る第六感と無分別智

職人に「直感とか第六感というのはあなたにとって何だ」と聞いたとき、「視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚という五感、それらの全部丸ごとです」という答えが返ってきた。それは、脳科学で言えば、職人は古い動物の脳を使っているということになる。大脳新皮質の分析的な脳だけでなく、総合的に入ってくる情報で判断している。分析的な部分と、それから総合的な、仏教でいう無分別智である。経験的に職人が、良い物を作りたいという一心でやっている、そういう無分別智が働く。おそらく仏教が入ってくる前の多神教で成り立った神道の世界では、日本人はみんなこの古い脳、動物の大脳辺縁系で情動作用のあるところを使っていたのではないか。だから森の静けさでさえもパッと感覚に入ってくる。インテグレーションとして入ってくるもので、神の存在とかそういう

ものを感じる土壌があって、そこに仏教が入ってきたけれども、どちらかを捨てるという西洋流の勝ちか負けかではなくて、習合する。習合してまたそこで人との総合智みたいなのを作っていったというのが、日本文化の基盤にある。

そういった能力を日本というのは非常に精鋭化して持っているはずで、それを見直さなければならぬ。今の西欧近代というのは分別ばかりである。二元論で A か B かという、そんなものばかりだから、多分早晚行き詰る。真に役立つのは、分けないところ、総合知であろう。

風土的に見ても、ドイツなどは古くは言ってみれば森の民である。そこに何か神秘的な多神教の世界があって、日本もそうである。ヨーロッパの中では、ドイツは南の方の国から見たらあまり進んだ国ではなかった。そこに独特の文化風土が生まれ、モノづくりの面ではとても南の方にはできないような技術をドイツは持っていた。そういう点は日本とよく似ている。それは、近代から見ればアニミズムの世界かもしれないが、実はそのようなアニミズム的世界をも包含し、総合的に真理を極める能力を両国は持っていたのである。

第2章 新しい日本の文化創出に向けて

今日のヨーロッパ文化の源は古代ギリシア文化・古代ローマ文化にある。それはヨーロッパの各種庭園に明確に表れている。ティヴォリ庭園のようなイタリア式庭園は、イタリアで発掘された古代ローマ帝国時代の庭園遺構の模倣から始まったものだった。ヴェルサイユ宮殿に見られるようなフランス式庭園や、ブレナム宮殿庭園のようなイギリス式庭園は、いずれもイタリア式庭園の別々の部分の模倣によって誕生した。フランスの印象派絵画もドイツの古典派音楽も、イタリアの絵画音楽を継承発展させることによって誕生した。そのイタリアの文化のルーツは古代ローマの文化に、そして古代ローマ文化のルーツは古代ギリシアにある。

同じように、今日の日本文化は、古代中国の文化に学び、それを万葉集以前の日本人の感受性、心の在り方に沿って日本風に変容させることによって発展してきた。文字はその典型で、たとえば一説では、天ぷらの語源は「調味料」を意味するポルトガル語の *tempêro* とされる。それが外来のモノで、日本人にとってまだ異質なモノであった頃は「テンプラ」とカタカナ表記されたが、その後、日本人の生活のなかに定着すると、「天婦羅」や「天ぷら」と、漢字表記や平仮名表記になった。

1. 日本文化とは何か

例えばお寿司は東南アジア、天ぷらはポルトガル、三味線や能は中国から伝来したと言われるが、それらが日本文化、日本らしさとして定着するに至ったのはどういうことなのか。外来のモノで、それがまだ異質なうちはカタカナ表記で記すが、日本に定着すると漢字平仮名表記になると言われることもある。「繊細で手が込んでおり匠の技が生きている」だけでは日本らしさとは言えない。他国にも非常に繊細で手が込んで匠の技が生きているものが沢山ある。繊細さに加えて、日本という風土に由来する思想、環境、材料などが活かされていることが要件になるのではないかと思われる。

音楽の場合で言えば、19世紀以降ドイツ音楽が力をもったのは全部イタリアを真似たおかげである。バロック時代というのは1600年から1750年で、ドイツは後進国であった。ドイツ音楽の父と言われるシュッツという人がいるが、ヴェネチアへ勉強に行っている。多くの領主は音楽家をイタリアかフランスに送る。コンチェルトというのはイタリアから学んできて、合奏する形はフランスから学んできた。オペラはイタリアから学んでくるとフランスから学んでくるとがあった。それを自分がドイツ語圏に入れたと言って威張る人物が出てくるのは1700年ぐらいである。バッハは珍しい人で、外国には行っていないが、イタリア協奏曲であるとかソナタやカンタータなど、彼の作品にはイタリアに影響されたものが多い。それからフランス風の組曲も書いた。組曲の1番、2番も、フランス音楽の真似である。曲名もみなフランス語である。そういう後進性があったということが一つの要因としてあげられる。

みんな過去がないと新しい物は生まれてこない。ヨーロッパでいうと、音楽でも美術でも建築でも庭園でも皆イタリアが最初である。それはやはり古代ローマ帝国があったからであろう。そこへ帰ろうという考え方がずっとあった。イタリアは本来ヨーロッパの先進国だったが、イタリアのルネサンス文化はイタリア国内では十分に継承されなかった。他方、日本やドイツには職人制度があり、そのため古い文物が断絶しないで面々と続いてきた。それが大きい。さらに日本の場合には、

新しい物を入れて和漢混交とか和洋混交というのが出てきた。

日本では、新しいものがやっても古いものを捨てず、新しいものを伝統的なもののなかに取り込むようにしている。それは音楽の受容にも現れている。音楽の初期の教育法というのは、全く音楽に触れたことのないような親が息子や娘に徹底的に教え込む。その教え込み方というのは、まさに工芸分野の技術の伝承の仕方ととてもよくつながっている。

いわゆるヨーロッパでも北の方、ドイツも含めてケルトやら、バイキングのノルウェーだとか、そんなところにはかなり日本と共通する要素がある。一見すると遅れた国、遅れた地域だけでも、ロジカルに物を組み立てていく、南方にはないものを持っている。ロジカルな要素というのはソクラテスとかプラトンの時代から営々と受け継がれてきているが、実はヨーロッパには、それ以前のイオニア等のもやもやとした文化的要素もある。ヨーロッパの北方と同様、日本は稀有なことに現代にいたるまで、感性のようなもやもやしたものをかたくなに守りながら、他方では柔軟に外のモノを受け入れ、ロジカルにモノを考える特殊な歴史的展開をしてきた。

日本の中小企業に目を向けると、そのサイズでは世界中のニーズをまかなうだけの数を作れない。そうであれば技を駆使した行き届いた商品を欲しい分だけ作ることで企業が成り立てば良い。年商1億の企業が100企業生まれたら100億である。そういう考え方はこれからの経済の中で考えていけないといけない。本当に馬鹿げたことだと思うが、色んなところで評論家が言っている経済の仕組みと云ったらグローバル企業に当てはまることばかりである。そんなものは中小企業が聞いても何の役にも立たない。それにも拘らず、それが普通に言われ検証もされていない。そのようなサイズの感覚がない議論ではなく、日本の産業実態にあった議論が肝要である。

2. サブカルチャー

一般的にプロダクトの伝達は情報化社会に特有のツールを使いながら伝播していくが、漫画のよ

うな文化的なツールのもたらす伝播力の大きさにも注目しておく必要がある。フランスのパリに日本文化会館があり、そこで日本語のコースを提供しているが、近年になって従来の平均の2.5倍ぐらいの若者が日本語を習いに来ているという。それは日本に留学することを当初の目的としているのではなく、漫画を読みたいというニーズで来ている。翻訳されていない日本語で書かれた漫画を読みたいという動機が一番多いと言われている。

漫画が関心の糸口になっているのは確かで、各国から京都で勉強したいという留学の問い合わせも増加している。彼らにきっかけを聞くと、やはり漫画で日本のことに興味を持って、それで実際に自分で行ってみたいとなったというように、漫画との関わりをはじめポップカルチャーに言及する人が多い。J-POPなどの音楽や漫画みたいなことに触発されて、それが最初の入口になっている。

漫画はホーリスティック（統合的・包括的な情報を持つ）であり、絵の情報も言語の情報もあれば、オノマトペ的な情報もあったりする。あと人間関係情報なども入っている。社会の暗黙のルールみたいなものをなんとなく漫画を通して知ることもある。漫画を通して来日した人は、意外に日本に対する幅広い知識を持っていたりする。そういう意味では漫画には総合コンテンツ的なところがある。

3. 数百年先の文化創出も視野に入れて

日本文化を創出するという観点で見ると、日本の風土、文化は、すべて「何々になる」という、自然に時間をかけてそのようになるプロセスを持っている。文化というのは人々の生活や営みの中のものが凝縮されて形になっていく。ところが、例えば日本の伝統工芸一つをとっても、必ず時代時代に突出したことをする人が出ている。それすら日本人は受け入れる。日本人は何でもかんでも受け入れる、受容するという、決して瞬発的にあるものを排他的に除外するのではなくて、一旦受け取って、寝かせておいて、やがて200年、300年経つと文化になっている。例えば友禅染という伝統工芸があるが、友禅という染めの技術を世界中に探してみても、絵を描き染めるという技術は

他国にない。友禅染では、染めだけでなく筆で絵を描くことが基礎になっている。焼き物もそうである。それが今日では「文化」になっている。それらはやはり200～300年熟成した結果、文化になっているのである。

そのように捉えると、200～300年先のことも議論しておかなくてはならない。現在のポップカルチャーも、今は文化かどうか従来の物差しでは分からないが、200～300年たてば文化になっている可能性がある。B級グルメがなければA級グルメもありえないように、サブカルチャーがなければ高級文化もありえない。そこを踏まえた議論をしておかなければならない。将来、どこかの図書館で本研究会の報告書が見つかり、300年後の学者が見て、「300年前のけいはんな研究会がすでに予言していた」となったらすばらしい。

さて、文化は一方では創り出されるものではあるが、他方では人々のあいだで受け入れられていかなければ、「文化」として認知されるにはいたらない。

そのような観点から考えると、例えば烏丸御池にある漫画ミュージアムの重要性が明らかになる。単に漫画を読んで楽しむだけで終わらせるのではなく、より積極的な活用法を考えてもらう必要がある。大人も含めて漫画を読むことによって、将来に対してどう考えるかといった使い方が提案できると非常に良い。

4. 求められる神社仏閣の保有する資産の棚卸

お寺が持っている様々な資産や文献などから価値のあるものを引き出すことも文化創出のためには重要である。

そのためには、まずそのお寺のスタッフが、財物や文献をどれくらい理解しているかが課題である。宝物庫にあるような貴重書や、そういったものを持っておられる個人が、その価値に気づいていないことが結構ある。それで、大学の研究者などがふと立ち寄って価値判断したりとか、これはいいものと見つけたりして、それがまたそのお寺の目玉になったり、社会に広く評価されたりするような流れになっていく。

お寺の持っている様々な国宝級の芸術作品をアーカイブ化しデジタル化することも大切だが、古文書を修復する技術も育てていかなければならない。京都には古いものがたくさんあるのだから、そういうことにもっと関心を持たなければいけない。

修復で有名な人だが、オックスフォード大学を出たイギリス人が京都で修復作業に従事している¹。彼はここにビジネスチャンスがあると睨んで会社を興した。京都市内の修復屋さんで、古文書の修復など世界各国から引き合いがあって、大変多忙ということである。

100年先、200年先のことまで考えながら議論することが非常に大事である。そういう観点からすると、これからの日本社会とか、世界全体もそうであるが、情報化社会など、社会の形態がどんどん変わっている。そうした中で、例えばどういう産業が求められていくか、どういう社会形態になっていくかということを考えながら、京都の持っている、例えば漫画とかアニメとかその他いろいろあるが、そういうものがどういう形で将来社会のニーズに合うような産業に展開していくかという観点を入れて検討することも大事である。

¹小西美術工藝社の代表取締役社長であるアトキンソン・デービッド・マーク氏。
<http://www.konishi-da.jp/>

第3章 事例研究

1. 伝統工芸に根本を持つ京都発のグローバル企業

日本には創業100年以上の企業が十万社以上あると推定されるが、そのうち4万5千社は製造業であり、その中でもっとも古い企業は578年の飛鳥時代に創業した金剛組という建築会社である。ヨーロッパにも創業200年以上の企業のみが加盟できるエノキアン協会というのがあるが、その最古企業でも1369年の創業ということで、日本は世界の中でも突出して古い企業が残っている国である。それから日本では製造業の多くが創業から長く続いている。ここには「職人のアジア」としての特長的なものが現れている。背後に安定した王国、帝国、国のガバナンスのようなものがあって、権力者が職人を手厚く庇護してきたのでなければ、ありえない歴史である。別の視点でいうと、国家や政府への安心感が根底にあることが長く続いてきた一つの要因である。もう一つ、「職人のアジア」の対極にあるのが、華僑とか印僑に代表される「商人のアジア」である。「職人のアジア」には「削る文化」がある。「商人のアジア」には「重ねる文化」が根付いている。西洋との対比で見ると、西洋は「単一思考」で「細分化」の文化だけれども、東洋の場合は「相対合一論」ないし「総合化」の文化である。「職人のカン」は暗黙知とされるが、実際には「物理のかたまり」であり、数式の世界に展開できるものである。

京都域内には関ヶ原の戦いの時ぐらいにできた福田金属箔粉工業という会社がある。これは元来金箔を扱う会社であったが、現在ではスマホの基盤の銅箔や電磁波シールド塗料などハイテク材料を創っており、ここの技術でしか出来ないものを開発生産している。京都の域内にある企業には、堂々としたグローバル企業も多数あるが、実は根っこには伝統工芸があることがほぼ共通している。大きなインダストリーという文脈とはだいぶ異なるのである。日本の得意技で、大きく展開するという切り口も当然あるけれども、京都でないと出来ないとか、日本でないと出来ないというものが結構ある。村田製作所も京セラも起業からま

だ100年も経っていないが、そこで作っている工程を見てみると、大量生産の工程ではあるけれども、それこそ焼物をどこかでボンと手でひっくり返すようなところまで門外不出で入っている。大量生産方式だけれども手工業的な要素がたくさん入っている。それで他の世界の企業が作れないような、シェアでいうと世界で70%を超えているようなものを生み出している。従って、文化の活用についても、グローバルなインダストリーの要素と、伝統的な手工業的という要素の、二つの流れで追っていく必要がある。

京都市街地からけいはんな学研都市につながる南部地域には京都府下の中小企業の7割がひしめいている。その7割ある中小企業は、ある種のグローバル化した大企業が新しい製品作りをする時の材料の調達先である。それから、ユニット化して、これでいこうと決まったらそれを下請けでもっとよく作ってくれる人たちがいる。要するに技術集団を抱えている。非常によく似ているのがドイツである。その7割ある中小の技術関係の会社の多くは京都の伝統産業にルーツを持っている。例えばエレクトロニクスで超微細加工技術のルーツは絹の捺染、つまり絹で作った謄写版である。その謄写版で線が引けたから超微細加工が出来た。これもルーツは友禅染の技術である。

村田製作所のセラミック技術は、京大の材料の先生で、セラミックをうまく焼いて、ラジオのコンデンサみたいなのを研究する専門家が、その頃の20人か30人ぐらしかいなかった村田製作所にセラミックを焼く技術を教えたことに始まっている。どういう焼き方をしたらどんな性能がでるかというのを、学生を使ってテストしていた。それで先生が「こういう材料をこういう配合で焼いてこい」とか言って焼いてくると、学生がそのテストをして、「これじゃあかん、もうちょっとこういう比率で」というようなことをやっていた。

恐らくこの先生が一番最先端の学術論文の中に、この材料でこんなコンデンサを作ったらすごく

良い性能がでるといふのを見て、焼物だから京焼ということで発想されたのだろう。初代の村田昭さんが困り果てて、焼物だから粘土を焼くと縮む、水分が飛ぶから、どうしても寸法安定性が出てこないで、産技研へ相談に行かれた。産技研の人は、「焼く時にこの粘土を2%ぐらい混ぜたら良い」と教えた。そんなものはまさに経験である。その粘土をちょっとだけ使ったら焼物の寸法があまり縮まないことを知っていたと思う。それが成功して、そのきっかけで村田のセラミックコンデンサは世界でナンバーワンになった。

伝統的工芸品産業の振興に関する法律（昭和49年5月25日、法律第57号）に基づいて経済産業大臣により指定された日本の伝統的工芸品指定品目は、全国で合計222ある。京都府内での指定品目は、西陣織、京鹿の子絞、京仏壇、京仏具、京漆器、京友禅、京小紋、京指物、京繡、京くみひも、京焼・清水焼、京扇子、京うちわ、京黒紋付染、京石工芸品、京人形、京表具の17個ある。これらも新たな産業や製品の創出に寄与する重要なアイテムであると言える。

ロームやオムロンや京セラといった京都の企業はベンチャー企業のように思われていて、それに違いはないが、しかしそれはゼロから生まれたモノではなく、京都伝統産業の一部を母体としている。今日、大阪の経済が元気をなくしているのに比して、京都の経済はかなり元気だが、それは京都に伝統産業のあるおかげではないか。

2. 伝統技術と先端技術の融合

この10年ぐらい、皇后陛下が小石丸という名前の蚕をお育てになっている。純国産の蚕で、普通の蚕と違って、落花生の恰好をしており真ん中の部分がかびれている。もう一つ、日本と中国の種をかけ合わせた、白繭種（はっけんしゅ）というものと2種類を作っておられる。両方とも箏弦の材料としては極めて優れている。日本の箏には、今は99%化繊弦が掛けられている。切れにくくなったが、音色が悪くなってしまい、演奏者も聴衆も音色に鈍感になった。演奏会で切れる心配がないから良いが、その一方で演奏家は肩や腕を壊すおそれがある。それを何とか解消するために絹糸をもう一回日本の箏にかけようという活動が実

践されている。皇居の糸と同じ種類の蚕を茨城県の農家で作ってもらったり、あるいは異なる種類の蚕を作ってもらったりして、実験をずっと重ねている。その結果、切れにくくて音色が良い弦ができたが、これをさらに安い値段で提供できれば、これから日本の箏弦と箏演奏家の課題を解決出来る。

三味線の撥も材料面での課題を抱えている。三味線の撥というのは、木撥は練習に使うが、本当は象牙でなければいけない。丸耳象というアフリカの象である。それが欲しいがために、狩猟が禁止されている象を密漁する人も多い。解決法としてどうしたら良いかという、結局一番の問題点は、見た目とか比重が同じモノを作ることはできるが、象牙のように演奏者の汗を吸収し、必要なしりがある材料がないことである。例えば、撥のしり具合をなかなかシミュレーションすることはできない。それで今関係者が考えているのが、3Dで立体コピーを作ることと、よい化学物質を探すことである。

それからもう一つの問題は三味線の皮である。京都に固有な柳川三味線は子猫を2匹使う。他の多くの三味線の場合、大きな猫の上方を表皮に、下方を裏皮に使う。義太夫節の三味線では、表皮に猫皮を使い、裏皮に犬を使う人もいる。どちらにせよ、三味線の皮、しかもよい状態で張られた皮をシミュレートすることが出来ない。三味線の皮は均質ではなく、粗密があり、それがよい音色をだすものである。だからその粗密の状態をシミュレートして、それと同じ状態を作れる良い材料ができれば、猫や犬を使わなくても済む。さらに職人による張り具合も影響する。うまく張れたものを、破れてから測ることはできる。多分光学的な手段によって、張った状態を計測する必要がある。大手の化学会社に三味線に使える膜を作って試してもらうことを打診しても、とても難しいと言われる。しかも皮を張るというのは特別な技であり暗黙知である。なかなか伝承させるのが難しい。

いろいろとシミュレーションを行い、研究して、三味線に使える素材をこうしたら人工的に作れるのではないかとということを探求することによって、その成果が例えば宇宙産業の何かに使えな

いかとか、そういう製品に結び付いていくような技術開発につながるかどうかということを別途考えると、何かもっと新しい用途が出てくる可能性もある。どういう所でどういう風に研究をしたら、どういう新たな成果につながっていくかというようにすることも考えていくことが肝要である。

3. 日本で一番古い楽器としての梵鐘

お寺の鐘、梵鐘というのが現在まで使われている楽器として日本で一番古い楽器だと言われている。銅鐸も使われていたけれども埋められてしまった。それからいろんな土笛とか岩笛があるが、それも皆使われなくなってしまった。梵鐘だけはとぎれずに使われてきた。何年に作られて、直径が何センチ、重さが何トンというデータはかなりある。しかし、どういう音の高さをもっているかという音響分析のデータは全くといって良いほどない。たしかに、鐘の音を回りの音が入らない状態にして、録音することすら難しい作業である。日本の重要な楽器として、一つ一つの鐘がどのような基音をもち、どのような倍音を含んでいるかを分析したデータベースが必要である。

しかも鐘というのは、今のところ日本では自動的にやらないで人間が撞いている。その撞き方はノウハウが難しい。だから昔から、鐘を撞く時に、「捨て鐘」といって三つぐらい余計に打っても良かった。除夜の鐘を打つ前に三つぐらいは捨て鐘でやって、それからちゃんと打つ習慣がある。その鐘をどうやって打つかというのは非常に面白い問題で、撞座が鐘についているが、その位置が時代によって段々変わってくる。それを考えなければいけない。環境としても鐘の音が鳴っている空間がやはり重要である。それを今のうちにやらないと、いろんなところからうるさいという声きて、除夜の鐘も撞けなくなった地域があるぐらいである。

祇園精舎の鐘の声とか言うが、祇園精舎に鐘があるわけがない。中国から朝鮮半島を通して来たが鐘の形が変化した。だから今の日本の梵鐘は、日本で生まれた文化だと考えられる。そういう面から言うと、もっと日本で鐘を大切にしなければならない。仏教の関係者も鐘に対してはあまり関心をもっていないように思える。

心理学の立場で考察すると、聞こえている以外の音の周波数みたいなものが、結局なんらかの形で身体症状とか、ストレスを軽減するといった、何らかの良い効果を持っているのではないかという気がするが、そういうものを調べる必要がある。100kHzぐらいまでの周波数を人間は体で感じるという²。耳では20kHzぐらいしか聞かないけれども、そういうものがどういうふうに鐘の音として影響しているのか探ることは面白いのではないか。

寺院によって鐘の形状も違うが、それは違う音と効果になる。日本の鐘は、一つの鐘からいろんな高さの音を聞くことが出来る。最初に打った時に弱いフォルマントが、一秒後に強くなっていくという具合で、とても複雑な響きをする。

江戸時代は、鐘が聞こえると、町民というのは時間を知ることが出来ることからお金を払わないといけなかった。ほんのわずかな金額ではあるがお寺が集めた。東大寺ができたとか、薬師寺ができたとか言っても、庶民はそう簡単に入って細かい楽器や仏具を見るわけではないが、鐘の音だけはどこにいても聞こえてくる。その意味では非常に重要なものであった。せめて京都の梵鐘が幾つあって、どんな響きを持っているか分かれば、日本全国にそれを普及させることが出来る。

狂言に「鐘の音」という作品がある。大名が太郎冠者に「子供に太刀を作ってやるから金の値を調べてこい」「鎌倉に行って聞いてこい」と言うと、太郎冠者がうっかりして「鐘の音を聴きに行ってこい」と言われたと思って、「寿福寺や極楽寺は音が小さい」「建長寺の鐘はジャン、モン、モンと素晴らしい」と報告する。それで大名に叱られるという話である。

ここでも、オノマトペで鐘の音を表すわけである。だから、「あそこのはゴワーンだ」「あそこのはジャラジャラ」などと言う。そういう感覚は皆さん持っているのではないかと思う。聞いただけで、あれはあの寺の鐘だとか、あれは違うとか、何と

² 大橋力『ハイパーソニック・エフェクト』、岩波書店、2017年9月

かの寺の鐘が鳴ったからそろそろ6時だとか、そういうのはあるのではないかと思う。その感覚と

実際の音響分析とがどういう相関にあるのかが分かれば社会に還元できる。

第4章 日本文化の発信

1. サブカルチャーの海外進出と日本文化の発信

漫画やアニメなど、昔は子ども向けのものだと考えられていたが、日本の漫画やアニメの作りこみやストーリーの展開が、結構大人の視聴に耐えることが他の国にも認知され、ファンがすごく増えてきた。漫画は、最初のうちは本当に子ども向けの、ある種の娯楽みたいな部分から始まった。それを、手塚治虫以降の人たちが、職人芸的に高め、ストーリーの展開や人物の造形を高度に練り上げていった。その結果、漫画人口が増え、漫画で生活を立ててみようとする人が増え、いまや漫画は文化に昇華していきこうとしている。数十年前の漫画と今の漫画では、ずいぶん雰囲気が変わってきている。たった何十年かでかなり飛躍的に変わってきた。

「繊細で手が込んでいるだけでは日本らしさではない」と指摘されているが、それはまさにこれらにも当てはまる。技術がどんどん発展していくのはもちろん重要だが、もっと重要なものは日本的なキャラクターである。海外に受けているのはこのキャラクターであろう。例えばワンピースとかナルトは世界的に有名である。忍者が日本文化の海外進出と合わせてうまく漫画とマッチングしたこともある。ワンピースそのものは海賊の漫画である。その中に結構日本的な侍の要素が入っていたり、地獄絵図も入っていたりして、海外にも受け入れられやすい。この日本独特の味が受けているのである。

2. 日本人自身に向けた日本文化の発信

三味線の演奏において、撥の動かし方がジャンルによって異なる。そのため、三味線の撥はジャンルによって大きく違う。義太夫の撥と長唄の撥では持つときの角度も90度違う。しなり具合も重さも違う。一番軽いのが京都の柳川三味線の撥で20gであるが、義太夫の撥には200gあるものもある。だから撥をいかに使うかということが響きを決めている。駒もジャンルによって非常に違う。駒職人が辞めてしまうので良い駒が出来なくな

っている。

駒の材料は水牛の角と象牙である。そこに義太夫節の場合は駒の重さを決めるために鉛を打ち込む。鉛の重さで一匁の10分の1ずつ変える。それで今日の高さはこれくらいだから、皮の張りはこれくらいだからって言って、駒を選ぶ。それで舞台の上でたまに三味線の基準音をちょっと高くしなければいけない時がある。そういうときは、舞台にもう1個駒を持っていて、ピッチを変えるときに駒も変える。そこまで気を使っていい音を出そうとしている。駒の研究もこれから大変なことになる。駒の材料も作り方にしても、良い駒屋がなくなってきている。京都にあった良い駒屋が廃業したりする。ユネスコは日本政府に対して三味線や義太夫節、文楽、それから歌舞伎を世界遺産として保護すべきと言っている。しかし保護すべき音楽の状態は必ずしも十分ではないので、何も出来なくなる可能性がある。100年もしたら歌舞伎ではギターを使っているかもしれない。

日本文化のこのような事情は、日本人自身も知らない。日本文化を発信するというと、対外的な発信ばかりが考えられるが、じつは国内向けにも発信しなければならない。せっかくアーカイブなども作っているのに、それを海外のみならず、日本の若い世代にも共有してもらいたい。

3. 京都の文化・芸術に関するデジタルアーカイブ化と世界への発信

帯の柄や着物の柄など、自分の家にはパターンが何千もあるという風に、過去からのものを積み上げて残している町家がある。当然置いておくだけではなくて活用もされているであろうが、そういうものは例えば火事が起こったら全部喪失してしまう。なんとかしてそれを京都国立博物館かどこかに寄託してもらって、電子化して残しておくとか、アーカイブみたいなものを作っておくとか、伝統を保存することも、京都府としては是非やってもらいたい。そういうものをネットに載せておくと、世界中の人が京都に観光に来るときに調べ

たりして、「この伝統産業を見に行こうか」とか、あるいはそういうものを「使わせてもらう」といったことに繋がるかもしれない。そういう風にして京都の伝統産業を育成していく。観光振興をまず一つは目標にして、京都のそういう非常に価値のある、世界的にも京都に遺されているデザインなどを、いろんなことに役にたつようなアーカイブにするよう進めるべきである。知られていないこともまだ沢山ある。

明治時代の職人が刷り上げた、衣装の染め上げの見本がある。そんなものが古着として三条通あたりで売り出されていることがある。パリのブティックがそれを買って帰って、それらの中から、次のニューモードのネクタイ柄を選択している事例がある。日本の中ではものすごくぞんざいに扱われてしまっている。多分もう廃業してしまったような所で、蔵からそんなようなものが出てきたとしても多くの場合は廃棄物にされてしまうが、その中に実は宝物が埋まっている。

過去と現代で価値が変化する事例も多い。ヴァイオリンにおいて、ストラディヴァリは、最初はブランドではなかった。19世紀には音がうるさいということでどちらかといえば嫌われていた時期がある。アマティというヴァイオリンの方が良いと言われていた。ストラディヴァリを湯気に曝して音を柔らかくした人もいるぐらいであったが、20世紀になってからホールが大きくなって、しかも張る弦が違って、昔はガット、羊腸線、それが金属の弦になっても耐えられて大きい音が出るというので、19世紀の終わりから20世紀になってから、ストラディヴァリは有名になった。後から価値が出てきたのである。

4. 求められる伝統文化、伝統技術を基盤とした第二創業

アーカイブ化することにより新しい領域で古い技術が使えるということは、これからも様々な分野で起こってくるだろう。友禅染の型染めの技術が半導体の製造のパターンを形成する技術に使われたように、ある技術が将来何に活用できるのかはまったく判らない。

これまでは個別の企業の努力頼みというのか、例

えば福田金属が金属箔や粉の技術を携帯電話に応用するというように、個別で努力されてきたが、他方では、こちら側にB to Bだと技術を買いたいが、どこにアクセスして良いか分からないといった人たちがいるのに、今のままでは彼らにせっかくある技術を提供できないでいる。

創業何年ということも大事であるけれども、実は京都のそういう創業何百年を超えるような企業が生き延びていられるのは、その時その時に違う分野へと第二創業をしているからである。それまでの主たるマーケットとは違う分野の需要が入ってきた時に、それに対応するように必死になって技術開発をする。そういう能力をもった中小企業が京都域内にある。新しい情報がもたらされた時に、パッと転換するというフットワークの良さ。規模が小さいからこそ出来るのであろう。

一時京大の経済研究所におられた児玉先生が調査されたことだが、京都、滋賀の域内には中小企業でR&D経費に利益の10%以上を投入している企業がものすごく多い。同じことを東京の多摩地区で調べたら全国平均と一緒に5%位だった。だから京都では金を使ってでも研究して新たなモノを開拓している。そういうことを踏まえた上で、大きな産業技術の展開にもつながると非常に良いし、京都地域でグローバル企業になった17社は殆どみなそういう所からきている。ベンチャー創業の時にそれぞれの領域の技術を寄せ集めて立ち上げられているのである。

5. 伝統技術コーディネーター

アーカイブ化は非常に重要である。同時に、アーカイブ化されたものをどうやって使うかという、コミュニケーターのような役割の人材の育成が必要である。「2%ぐらいこれを混ぜたら良い」とアドバイスできる人材がいて、さらにそのアーカイブがあった時に初めて、情報が欲しくてもなかなかアクセスできない人の需要に供給がマッチングするようなシステムを提供できる。そうすることで、非常に大きくて新たなブレイクスルーが起きうる。伝統技術コーディネーターみたいな存在が重要なのである。

最近サイエンス・コミュニケーターと呼ばれるよ

うな人がいる。科学者・技術者と市民をつなげる人のことである。そういう人たちがいれば、例えば伝統技術を保存することにも役立つし、観光産業にも寄与するし、さらに伝統技術を学んだけれども、退職された方の新たな働き口にもなるかもしれない。様々な技術が色んな時代に開発されてきたものの、開発された当時には評価されなかったものもある。そうしたものを研究者は、あまり価値判断せずにアーカイブ化する。そういったアーカイブ技術を、こういう産業界とうまくマッチングすれば、時代における価値判断に左右されない形でアーカイブが出来る可能性もある。

6. 職人の育成

日本の音楽も色々あるが、誰もが初歩的にずっと入門していけるようにならないものか。西洋音楽だと初歩からずっと入っていける段階がすごく整備されている。天才の音楽家は別にして、そのステップを踏んでいくと、ピアノにしる何にしる、一応のレベルに達する。そういう風に日本の音楽も構成し直したら、もっとプレイヤーやファンが増えるのではないか。

アメリカの芸術学部は、例えば絵画なら、ものすごく合理的に技術を教える。その技術を乗り越えて何かを作り出すのは本人のクリエイティビティによるものである。だけれども日本の芸術学部の例えば絵画の教授法は、「お前らの好きなようにやれ」、「そうでないとクリエイティビティのところまでいかないよ」と、初歩の教育段階をものすごくないがしろにしている。そこは日本の教育法の欠点である。

最近、寿司アカデミーみたいなものが出てきた。数週間その学校に通うだけで全部の技術を学んで、何年かの経験をもっているお寿司屋さんと同じくらいものを握れることになっている。むしろ賛否両論があり、超一流まではなれないと思うが、握り方とか、色々な配合のやり方とか、かなりのところまで教えてくれるそうで、ここで技術を学んでいる人たちがいるらしい。伝統ということに関すると、なかなかシステムティックな教育というのが、日本にはない。お寺に入っても、鐘の叩き方一つを体系的に習うことが出来ない。しかしこう叩けば上手く音が出るという教科書み

たいなものがあれば、皆さん叩く時に恐怖感を持たずに叩けると思う。そういう体系的なものが提供できると、例えば地方の人たちでも京都に行かずに、そういうビデオを見たり、あるいは何回か講習を聞くだけである程度のレベルに達することが出来る。そうなれば、伝統技術の継承が京都だけではなくて日本中で出来るようになる。

伝統工芸にせよ邦楽にせよ、間口が狭く、例えば小さい子がやってみようかなと思うにはかなり敷居が高い。例えばピアノとかヴァイオリンだと、小さいころから行ける教室も沢山あるし、なんとなく習わすことが出来る。ストラクチャがあるので、出来るなという感じがする。それに対して三味線は、小さいころからそこのおうちの方とか、周りの方がやっているところでないと、なかなかアクセスが悪い。本当はすごく才能のある人が沢山いるはずなのに活かされていない可能性がある。

昔は、ピアノの先生より、箏、三味線の先生の方が町に多かった。学校から帰ると、女の子がどこにお稽古に行くかという、箏爪の箱を持ってお琴を習いに行ったり、日本舞踊に行ったりして、ピアノに行く子はクラスに1人か2人ぐらいであった。数十年の間に邦楽に対するアクセスはかなり悪化してしまっている。

職人の訓練の仕組みでは過去においてはやはりドイツが一番しっかりしていて、それがオランダ経由で日本に流れてきた。日本も職人文化は結構あったが、システムティックな教育システムはなかった。全部一匹オオカミみたいな、群れない中で、技を身につけたい人は自分の親方から盗むしかなかった。その流れは現在においても引きずられている。

7. 日本文化の教育と国際学校の招致

これからの国際の中での日本、そして日本文化の育成を考えると、例えば、けいはんな学研都市に欧米の中高一貫教育の学校の進出を促すことも考えられる。そういう施策にも様々なメリットがある。全寮制の国際学校を開くことによって、日本文化と彼らの文化とを馴染ませていく。それを中学、高校ぐらいの若い年代から全寮制でやるこ

とによって、面白いことが実現していくと考えられる。これは既存の学校制度の規則の中でなく、国際学校制度の下で展開することで、その高校を卒業した人はバカロレアのようにアメリカの大学をはじめ国際的な大学に進学していくように出来るようになるだろう。

そこでの生徒は、日本人だけでなく、中国人なども含めた富裕層の子息の入学を促す。そうすることによって、日本文化も学ばせるし、けいはんな学研都市がインターナショナルな形で、透明性の高い形で国際都市として発展することも出来る。こういった機会を広くグローバルに発信するための梃として活用し、そこに日本人も加わることにより、立地する企業自身も国際的視野で活動することが可能となっていくので、域内の産業界も協力する余地が大きいと思われる。

8. 修復技術の蓄積と体系化

京都国立博物館の収蔵庫が KICK（けいはんなオープンイノベーションセンター）に作られて、2018 年の春から宝物をはじめ収蔵品が徐々に運び込まれ始める。それにあわせて、仏像など古い物の修理部門をこちらに誘致もしくは新設して、東洋文化に関する修復学校を設立することが考えられる。東南アジアの美術寺院や文化遺産は拙い修復をしているので、日本のみならず、中国、インド、ベトナムなどからそういった修復技術をマスターしたい人達をけいはんな学研都市に呼び寄せ、修復技術を学んでもらい、母国に帰国してからそこで活躍してもらおう。

アメリカやヨーロッパの場合も浮世絵など日本

の芸術作品が数多く所蔵されているが、修復出来ないまま放置されている。そういうものをここで修復し、修復技術をマスターさせる。そのかわりにヨーロッパ的な芸術品で日本にあるものは、例えばフィレンツェやドイツにあるような修復所に依頼する。そういった協力関係を作ることも一案であろう。

最近、ブータン王国の王女が日本に何回か来られている。その時に注文のあったことが、修理している寺院を見せてくれないかということであった。古い文化財がどんどん損なわれてきているが、ブータンの技術では修復出来ない、国内の修復士だけでは何ともならない。アメリカやヨーロッパの辺りの修復士とも色々と協議をしたらしいが、日本でないと駄目だという結論になったという。技術だけであれば、例えば西洋画の技術者も沢山いるが、やはりアジアの文化、特に仏教文化をよく理解しているという意味では日本が一番だというニーズが起こった。

京都国立博物館の修復部門、奈良国立博物館の修復部門、奈良文化財研究所、橿原考古学研究所といったところにはベテランもいる。修復に携わる人々がここに一堂に集まって切磋琢磨し技術を磨くようにしたい。しかし、日本人というのは、そういう職人芸みたいなものを学問にするのが下手である。フランスには修復や古文書の学校がある。そこで非常に優秀な人間を育てている。そのような体系化された教育を参考にして、けいはんな学研都市に修復学校を開き、世界と双方向に交流していく計画を実行していくことも一考である。

第5章 日本文化創出のための京都のあるべき姿を考える

1. 街そのものが資源循環の究極のコミュニティ社会

生産様式には、ユニバーサルにチェーン化され統一された中で動くシステムが存在する一方、京都のように、分散化されて個別で成り立っている企業が集合体をなしているところもある。新しい産業という、どうしても大量生産の工業的なことを思ってしまうが、他方、いわゆる流れ作業の分業方式がある。これは、京都で確実に育ち、世界に伝搬した生産方式である。トヨタの方式も実は大元がそこだと考えられる。伝統的な手工業だけでも量産できる。その流れ作業方式によって、いろいろな着物の数をこなす仕組みが江戸時代に京都で作られた。日本国内だけでやられていた独自の量産システムである。

江戸は当時世界で第3位のメガシティだった。人口はほぼ300万人で、1位はイスタンブールと北京が競っていた。ここが1位、2位を競っていて、日本の江戸が第3位であった。物流から言うと、多くの物品が上方から江戸へ搬入されていた。不思議なことに徳川幕府は経済政治の中心は江戸に置いたけれども、ものづくりは上方に残したままであった。それがうまく機能したということでもある。そのうちに江戸でも大衆向けの産業が生まれたが、大衆向けものづくりの始祖はといえばやはり本阿弥光悦である。光悦に私淑しその意志を引き継いだ尾形光琳は江戸で工房を開いていた。

日本がJapan as No.1と言われた時代のものづくりでいうと、ものすごく多様なものを歩留まり良く無駄なく作るシステムを作り上げた点にある。今日、日本の製造系企業で起こっている事例は、ものづくり大国と賞賛された時代が終焉したことを象徴しているのかも知れない。近年、規模の大きな日本のメーカーではグローバル化を目指すことにばかり急で、西洋のシステムを取り入れることが善で、日本のシステムは古くて駄目であると考えて、日本が築きあげたシステムを壊すことから始めた。その付けがいま回ってきている。

その10年～30年のインテグレーションで今の事態が起こっている。そんな経済原則ではなくて、顧客には良い物を出さないと恥だという日本伝統の精神を再評価しなければならない。

京都の和菓子屋は大量生産しない。京都には老舗のお店が多数あるが、みなあまり大きくしない。阿舍利餅は絶対防腐剤は入れない。その日のうちに食べる量しか作らないし、買えない。

京菓子には、茶菓子として使われる上菓子と、今宮神社のあぶり餅やふたばの豆餅のような庶民用の菓子の、二種類がある。これは、料理の世界に、高級京料理と京のおぼんざいというA級グルメとB級グルメがあるのと同様である。A級グルメが栄えるにはB級グルメがしっかりしていなければならない。その点、A級グルメとB級グルメがともにしっかりしているのは、イタリア、中国、日本くらいである。日本の中では特に大阪である。

日本がリードするとか、京都がリードするという、いわゆる今の現代社会のビジネス的な発想になりがちだが、京都はどちらかという共生する社会である。京都の産業界がそうであるが、勝ち負けというよりは、リーダーのうちの誰かが言い出したことを100%否定しない。そこはやったらいいだろうとなる。それは歴史に蓄積された知恵だと思うが、何かやったら失敗もあるし成功もある。成功した時には成功ということを残せばいい、失敗したら失敗もいい。自分とは意見は違っても、これはやったらいいとなる。やったらいいというのは否定の言い方と、それから実は自分がまだハッキリ分からないからやったらいいという、ちょっと遊びの要素というのか、そんなものがあるので、何かをリードするよりは、やはり共生するセンスがある。

これはまさに今西錦司が言った通りである。鴨川の生き物を見たら強いものも弱いものも皆一緒に住んでいる。動物の行動を見ていたら、絶対弱

肉強食ではない。食の連鎖はあるが、食べつくさない。強いものが先に食べるけれど、弱いものにおこぼれを残す。さらには、全部食べつくさない。食べつくしたら自分たちが死んでしまうから。だから必ず食が再生産するくらいしか食べない。だからいわゆる強い者が弱い者を打ち倒して征服し、自分たちの天下を作るという発想は京都にはない。

京都の料理屋組合とか菓子組合は200店舗あって、自分以外の人たちのお店も栄えてくれないと共倒れになると思っている。皆で協力して、皆で豊かになりましょう、皆で成功しましょうという共生と共栄の精神、共有経済の精神である。世界中で共有経済的精神が特に強く認められるのは、おそらくアムステルダムと京都である。これは自分の利益しか考えない現代資本主義の対抗軸になりうる可能性を有している。

オランダは運河がないといけない。運河は昔の道路である。運河沿いにお店があって、自分の所は他の人の所より大きく10間(けん)ぐらい間口を取れるけれども、3間分にして他の7間は入っていいですよ、皆で手をつないでリッチになりましょうというのがオランダである。あれに似たものが京都にある。

規模を重視した世界のビジネスの論調とは違う方向を歩んでいるのが京都らしいと言える。京都は多様な地域なので、例えば全体から見ると、一頃の西陣織の織物が不景気でちょっと左前になっているように見えるが、西陣織には糸染があるし、各工程に色々なものがぶら下がっている。そして祇園という花街があって、それを見るところの地域だけで完全な循環社会が形成されている。花街の芸妓さんたちはその時その時の新しいものを新調する。芸妓さんの一歩手前の舞妓さんは、お姉さんたちが着たものを洗い張りに出して循環して着ることで成り立っている。資源を循環しながら新しいものを注入する究極の循環社会を形成している。

2. 感情を鎮静化させる味わいの深さが醸し出す価値の訴求

音にしても、町の中で氾濫している音というのは、

実に無秩序でうるさい、嫌な音ばかりが並んでいる。京都へ来たら、どこのアナウンスを聞いたり何をしても、すーっと心が休まっていくような音の空間は作れないものか。

西欧の香りや音と、日本の香りや音は、ずいぶん違う。日本人には西洋の香水の香りはきつすぎる。日本の香道の香りはあるのかないのか分からないような幽(かそ)けき香りである。ヨーロッパの教会の鐘の音と日本のお寺の鐘の音もずいぶん違う。

安堵感みたいなものをハッキリと示すことがすごく大切なのではないか。例えば和食でも、健康にとってそれがどういう風がいいのかというのは、分かりやすい形で宣伝されてきた。音の響きの美しさとか、それがどれだけリラックスできる効果があるか。匂いもそうで、香りがそれでどれだけそれでホッとさせるかとか、いろんな淡いグラデーションがある。例えば京都の秋の紅葉ではグラデーションが大事である。そういう美しさを、美しい、素晴らしいと言っただけでなくて、実際に人にとってどれくらい心地が良いのかとか、それによってどれくらいストレスが下がるのか、そういうことがある程度検証できれば新しい価値の創出につながる。あるいは指標というわけではないが、「こういう風にこの良さが素晴らしいんですよ」と言ったことを、よりうまく伝える工夫をしても良いのではないか。

感情の文化比較をやると、ドキドキ、ウキウキによって活性化される覚醒度の高い感情がアメリカの社会では受け入れられていて、それこそ幸せの源であるという風に理解されているが、日本だとあまりそういうワクワク、ドキドキは良いようには捉えられておらず、むしろ沈静化する、感情を落ち着かせることの方がとても価値があると考えられている。日本の音や匂いにもどちらかというと沈静みたいな作用があり、そういうものの良さを見直すというのはかなりアピールするだろう。

3. ポップカルチャーの取り込み

ポップカルチャーはそれ単品というよりは、それを軸に肉付けしていかないとけない。漫画は京

都発ではない。どうみてもこれは日本全体で見ると江戸の大衆のカルチャーから出てきたものと捉えられる。それは浮世絵にもオリジンを求めることができるし、北斎漫画や、古くは鳥獣戯画にも求められる。北斎漫画を描いた北斎は、晩年、長野の小布施にひっこんでいたが、そこには農産物を江戸に持って行って財をなした人がいて、その人がパトロンになっている。北斎はそこで好きなだけ絵を描くことができた。北斎の画帳が残っているが、それはどう見ても京都発ではない。

京都は、たまたま都が長い間あったために色々な技術を地方から集め、物産があったわけではないのに諸技術が集約した。日本の封建時代、田畑は長男しか相続できないので、次男以下の働き手は様々な工芸の技術を身に着けることによって生きていかざるを得なかった。意外に京都地域は六代も前からつながっている家系が多いけれども、その元を辿れば北陸から来たという家はものすごく多い。そういったことまで掘り下げていって、漫画のあり様を、日本の産業の新しい在り方として、新しい情報化時代にどのようなふうに変化するかという議論までもしておく方が良いのではないか。

漫画は北斎漫画がルーツかもしれないが、漫画と割合密接な関係があるのは、映画や漫画の劇画である。日本は100年に一つぐらい主要な文化を生み出すと言われているが、映画は日本の場合、黒沢とか小津あたりで一つの頂点を迎える。黒沢や小津は東京の時代劇みたいである。一方で伊藤大輔は京都である。それはたぶん劇画とつながっている。

伊藤大輔は確実に京都の文化になっている。この大元をたどると琳派がある。琳派の総合プロデュ

ーサーの下にいろんな技芸をもった者が集まった。それと同じ構造を割と近代に作ったのが太秦の映画産業である。映画産業の総合プロデューサーは、その日その日にどういう場면을撮るのかということから、果ては弁当の準備までやらないといけない。全く総合的なプロデュースで、その制作者の頭の中にはそういう仕事の段取りまで入っている。これはもう光悦村であって、光悦のやったことを大掛かり化したものだと言える。だからそういうことまでも含めて、ポップカルチャーをこなしていくとすれば、京都にはそういう土壤がある。

映画産業は、これからの日本社会の中、都市や生活の中で本当にどういう風に展開していくのか。あるいは映画みたいなものではなくて、もっと違う媒体の方に移っていくのか、これは産業的な面から見た場合に大事な問題である。過去から現在までは確かにそういうふうにくるが、将来どのような形で花開いていくのか。今でも花開いているのかもしれないが、さらにどのように発展していくのかという、そういう見方も取り入れないといけない。

4. 世代を超えて受け継ぐ工夫

教育のように、世代を超えて受け継いでいくために、京都の中で子ども世代にその価値を伝える方法も考慮する必要がある。京都は学区が強いと言われるが、小学校にコミュニティの方も参加して色々な伝統的な事を教えることがあり、他の地域に比べてとても学校の力が強い。そういう所を通して、京都の価値を教育することが出来る。実際そういうのを既にやっている学校も沢山ある。京都の中の子どもたちが京都によく通じているような、そういう状況がさらに盤石になればとても素晴らしい。

終章 「先端的学術・文化・芸術都市宣言」を目指して

研究会の成果の活用の方向性として、「日本文化を基盤とした新たなモノ・サービスの創出」につながる何らかの成果をここから発信していくことに置いてはどうか。そしてこの目的を達成するには2つの視点が大切なのではないかと思う。一つは「将来の斬新なコンセプトが日本文化を基盤として提示できる」こと、もう一つは「過去から蓄積された日本文化の資産としての活用方策がここから示される」ことである。

一つ目の将来の斬新なコンセプトの提示という点は、例えば日本人が育んできた自然観や物事の捉え方、考え方について、歴史や文化の文脈の中から捉えて、それが何故そうなっているのか、根源まで遡れないかということである。また、もう一点、モノの在り方や存在意義、提供価値として、日本文化が培ってきたコトをモノに対して上乘せして、これからの社会に求められるデザイン、機能、性能などの新しいコンセプトを生み出していくことである。そのためには何が必要なのかといった視点での議論が一つの柱として立てられるのではないか。

もう一つの視点は、過去から蓄積された資産の活用という点であるが、第一に、伝統技術や原材料、技の活かし方について、伝統技法と先端技術の融合を前提に構想する力を顕在化させて、新たな科学技術の萌芽として利用できるようにすることが出来るかどうか検討しなければならない。これは知的財産権に当てはめると特許権的な視点になる。第二に、模様のパターンといったデザインや日本古来の表現といった著作物について、過去の蓄積から今日的価値を持っているものを発掘して新たな分野に適用していけるようにアーカイブすることができないか検討してみる必要がある。こちらはどちらかというとき意匠権や著作権的な視点となる。

1. 「思想、概念、コンセプト」から伝統文化を捉える

「日本文化とは何か」を「斬新なコンセプトの提示」から研究する視点として、「思想、概念、コンセプト」という置き方ができる。日本人が古来より脈々と受け継いできた自然観や物事の捉え方の蓄積から、今日の社会課題解決に対する新しいアプローチや、将来の斬新なコンセプトの提示につながる可能性を探るときに、日本文化をどのように捉えて説明すべきであるかという視点である。

まず一点目としては、日本人は四季を持ち、自然に恵まれ、神道、仏教など穏やかな宗教によって寛容と忍耐の精神を培い、まじめに工夫しながら生きてきた。日本人はそのような人間力を磨き、全体の調和を保ち、互恵の精神により歴史を築き上げてきた。

二点目としては、日本文化は受容力の高さを特徴とし、何でも受け入れることが出来た。古来、柔軟に良いモノを取り入れて日本の風土に合うようにカイゼンを積み重ねてきた。現在世界から評価されている、カローラ、ロボット、漫画、初音ミク³と非常に多様なものを生み出すことが出来たのは、その結果である。

三点目として挙げられるのは、過去からの蓄積された資産を尊重する精神を持っていることで、そのような精神があったからこそ、累積経験値が増大してきた。例えば歌舞伎や禅などで伝統的価値への渴望を満たしているものも、宮崎駿監督の作品に見られるような社会課題に対する今日的アプローチが可能になったのも、同じ精神があったからである。

最後に日本人が物事を判断する基準として、自然であるか不自然であるかということがある。こういう日本人の世界観は、日常生活はもちろん芸術文化および政治経済、経営などあらゆる場面にみることができる。

³ 音声合成・デスクトップミュージック用のボーカル音源、およびそのキャラクター

仮説としてこういったことを記述したが、これが本当なのかどうか、そうであるならばその背後や裏面にあるものは何かということまで切り込んでいけるような議論をさらに展開していけるとよい。

2. 「暗黙知、技、モノ」から伝統文化を捉える

「日本文化とは何か」を「過去から蓄積された資産の活用」から研究する視点として、「暗黙知、技、モノ」という捉え方をした。これは日本が育んできた伝統工芸とか文化とか芸術が、人に感動を与えてくれると世界的に評価されているが、そういった中に「暗黙知」として埋め込まれている原理とか摂理を科学技術によって「形式知」に変換していくことによって、イノベーション創出に向けた新しい科学技術分野の萌芽の可能性を探ることができないかという視点である。

例えば、燃料電池電気自動車用のカーボンコンポジット製の超高圧水素タンクに組紐の技術が応用されている。伝統的な焼物の技術を利用して世界唯一となる石英ミラーという反射鏡が実用化されている。醸造技術を利用したバイオテクノロジー関連商品が売り出されている。西陣織に使う金糸銀糸を製造するために真空蒸着技術が開発されて、その技術がタッチセンサーパネルなどに使用する透明導電性フィルムの製造に生かされている。この他にも折り紙や漆塗りで培われてきた日本古来の技術が、実際には最新先端の技術に使われているものがある。このように、「暗黙知」を「形式知」に変換していく視点が考えられるのではないか。

このように、日本の特徴的な文化を基盤として世界をリードする新しい文化を創出するための方法は何かを考えていければ良い。

3. 研究のアプローチの一例 —文化による音と音楽の違い—

文化による音と音楽の違いを論ずる場合、鳴り響く音そのものを対象とすることが多いが、鳴り響く音と音楽をどのように聴くか、という聴取の比較も重要である。梵鐘は日本でもっとも長い期間使われてきた楽器であるが、その聴き方が最近では変わってきている。そこで、京都にある梵鐘を分

析に耐える形で録音し、それを基本の周波数、倍音の強さ、それぞれの倍音の持続といった観点から分析する。その結果、時間による音色の変化が明らかになり、そこから伝統的な聴き方に生んだ物理的な根拠が明らかになる。この作業のためには、梵鐘作りの方へのインタビューも必要と考える。

楽器演奏においても、同じ楽器を使っても、伝統的な弾き方が新しい弾き方に押されている。その典型は、京都にしかない柳川三味線である。軽く薄い撥を使うが、最近の演奏者はそれを使いこなしてはいない。そこで、ほとんどただ一人になった伝承者・津田利子師（故・津田道子師の養女）の演奏と説明を録音・録画して、現代風の弾き方の違いが明らかになるように記述して、これからの演奏者のための基礎資料とすることも意義がある。

楽器の研究としては、緊急の課題である三味線の象牙撥のために、象牙に代わる材料の開発を行う必要がある。象牙を使い続けることは、環境を大切にす京都の発想に反する。最近、材料そのものは名古屋大学で開発されているようであるが、実用化はされていない。実用化のためには、よくできた象牙撥を三次元で複製し、それを、一級の演奏家との討議で、細部を詰める必要がある。

この作業は、高度の工学的手段と暗黙知をもつ演奏家との協力でしか行えない。前者については、京都の研究所が役割を果たせると考える。後者については、国際高等研究所のプロジェクトとして日本の優れた演奏家を京都以外から集める必要がある。この問題については、演奏家の団体が文化庁と話を始めているようであるが、工学と音楽学の分かるグループが統括しなければ、具体化できないものと考え。

4. 研究のアプローチの一例 —着物と和服文化—

着物はバブルの時に価値が高騰し、その経験から戻れなくなっている人がいる。未だにその業界の人で話にされるが、バブルの最中、東京の三越で展示会をしたとき、自分たちはこの価値はこの額だと思っていたのに、三越には3倍の値段をつけ

ろと言われたらしい。工芸分野は、作り手の物作り系と、それから商い系と、二種類がある。工部と商部と言う。工部の人たちはただ真摯に作っているだけであるが、商部はバブルの経験をしてしまい、結果として世の中に通販が普及したのも要因の一つではあるが、商部を衰退させてしまった。だから工部の人たちが自ら商いしないといけなくなった。これが近年の着物の衰退に拍車をかけた。それまでは商部の人たちがこういうものを作れ、そして新しい時代の新年にはこれを広める、今年の色は紫でいきましょうとか、いわばニューモードの創造であるが、そんなことが成り立っていたのが、結局バブル期後は潰れてしまった。それで一般の人たちが和服に親しむ機会がなくなってしまった。

昨今では外国人にも結構着物ブームが起こっている。今の伝統的な着物の着方というのは日本人の女性でもちょっと大変なのに、外国人の女性にとっては、とても自分ひとりでは着られない。それを、着物が簡単に着られて外から見ればちゃんとしているように変えたらどうだろうか。例えば外国だとパーティなどがしょっちゅうあるだろうし、日本人参加者は着物を着てくることを求められるだろうが、そういうときに簡単に着物を着て出向くことができるようにならないか。そうするための工夫が必要なのではないか。

女子大学では卒業生たちが着物と袴にブーツ姿をすることが多い。袴とブーツだと、動きやすく、走ることもできる。これは和洋折衷の好例だが、今後、日本文化を守っていくには、純和風にこだわるのではなく、「和洋折衷」の部分をもっと広げ、洋服姿でのお茶会、和服姿でのコーヒーなどをもっと広めたほうがいい。

明治維新以降の日本は「和洋折衷」を国是としてきた。疑似洋風建築、すき焼き、肉じゃが、あんぱんなどは和洋折衷の典型である。ところが西洋化が進むとともに、特に服装では「和」がなくなり、「洋」ばかりになってしまった。「着物と袴とブーツ」のような和洋折衷の服装をもっと広める必要がある。

今日、着物は正月や成人式など、ハレの日だけに

着るものになってしまっている。しかし和服はもっと普段着ることのできるものにならなければならない。それには、女子大の卒業式におけるような、着物と袴とブーツのようなスタイルを広める必要がある。

そういうスタイルがより一般化したら、毎週金曜日だけは和服にするなどの企業が出てくるかもしれない。そういう風習を導入する企業の第一号にはぜひ京都の企業に名乗り出てほしい。

このまま今の状態で 50 年も経過すれば、和服文化の基盤が大きく失われてしまう。歴史的に継承されてきた和服文化そのものを失ってしまうことになりかねない。

5. ポスト近代化の時代に向けて

文化とは何か、文化力とは何か、そういうことについても、もう少ししっかりとおさえておく必要がある。一言で文化力といっても、文化力には具体的にどのようなものがあるかというようなことを調査する必要がある。それが将来の産業に結び付いていくなら、それにこしたことはない。本報告書にも様々な観点で議論した結果が記述されている。例えば京都の持っている伝統工芸技術にはどんなものがあるか。染色とか、彫刻とか、織物とか、どういう産業にどういう技術があるとか、そういうことをまとめることによって、それが現在はどういう産業を牽引しているか、またそれが、現在はこじんまりした産業かもしれないが、うまく活用すれば大企業にも使えるかもしれないなど、将来の大きな飛躍につながりうる可能性を探る。

そういう産業界の持っているノウハウや、何千というような柄のパターンなどを個人の伝統産業の人が持っている可能性があるので、そういうものが散逸したり、火事で燃えて失われてしまわないよう、きっちりと集めてアーカイブする。さらにデジタルアーカイブにするなど種々の施策を施すことによって、外国からの需要にも応えられるようにする。例えばフランスの人から日本の平安時代の香りのノウハウを買いたいときたら、それでビジネスが成り立つ可能性もある。あるいはそういう伝統産業を見たいという人がどんどん

外国からやってくる可能性、観光産業につながる可能性もある。このような京都の持っているノウハウをもう少し整理してまとめて、将来ネットに載せて発信するなど、そういう方向での検討も必要であろう。

伝統産業に関しては、すでにある技術をうまく活用するのみならず、既に存在している伝統のデータをしっかりと整理して、誰でもアクセスできるようにし、それをビジネスに使うとか、観光産業に適用するなど、色々な活用法が考えられる。そういう色々な複眼的な視点から議論をして、まとめていくことが必要である。

産業のエコシステムとして京都には西陣織のように、分業しながら協力し、皆が共存する社会モデルが形成されている。これが将来の定常循環社会のひとつのモデルとなる。来年度においては、これをしっかりと調べ上げ、当該モデルのよい点、悪い点、改善すべき点などを明らかにしていくことにも取り組みたい。

さらに京都の「宗教とお祭り」を取り上げて、京都文化の重要な要素として議論していくことも重要である。

次年度にはもう少し詳しいこと、具体的なことを議論したい。味などの食の問題、着物の柄などの衣の問題もあるし、さらに文化を広く捉え、鐘の音や楽器についても具体的に検討すべきであろう。材料がないから現代の材料で置き換えることがなかなか出来ないが、それをどういう風に代替していったらいいかなど、色々な議論をしていきたい。それがまたとんでもない産業に結び付く可能性もないわけではない。

そういった視点に立ち、京都全体をダイナミックで生き生きとした先端的な学術・文化・芸術都市に育て上げるための方策を考える。一つのやり方として、外国の芸術家、文化人、思想家などを数か月京都に滞在させ、関係する日本人との深い交流や共同作業を通じて、新しい文化、芸術を創造する可能性を探るという方法もある。文化力の社会に与える効果を検討していくことも必要である。京都という都市、京都の市民生活を文化・芸

術力によってさらにより良いものにしてゆく方策を来年度さらに検討していきたい。その上でそういった視点を盛り込んで、「先端的学術・文化・

芸術都市宣言」を策定していくこととしたい。

以上

研究会開催経過

第1回

日時： 2017年9月22日（金）13：00～16：00

場所： 国際高等研究所 セミナー1会議室

内容： 開催概要、議論の観点のご紹介、研究会の趣旨や議論の観点に対するご意見

第2回

日時： 2017年11月21日（火）10：00～13：00

場所： 国際高等研究所 セミナー1会議室

内容： 検討すべき課題について
報告書の構成について

第3回

日時： 2018年1月9日（火）13：00～17：00

場所： 京都市産業技術研究所 2階ホール

内容： 報告書構成（案）に関する議論
白井 克明氏（有限会社りんよ工房・白井ベル代表）講演
京都市産業技術研究所の研究活動について

第4回

日時： 2018年2月14日（水）14：00～17：00

場所： 国際高等研究所 セミナー1会議室

内容： 最終報告書に関する議論
NHK ルソンの壺「“非”常識に商機あり～京の衣食住に新たな動き～」番組視聴
来年度の進め方について議論

研究会メンバー

代表者

西本 清一 京都高度技術研究所理事長、京都市産業技術研究所理事長、
京都大学名誉教授

内田由紀子 京都大学こころの未来研究センター准教授

熊谷 誠慈 京都大学こころの未来研究センター特定准教授

高橋 義人 平安女学院大学特任教授、京都大学名誉教授

徳丸 吉彦 聖徳大学教授、京都市立芸術大学客員教授、お茶の水女子大学名誉教授

長尾 真 国際高等研究所所長、京都大学名誉教授

「日本文化創出を考える」研究会

2018年3月

公益財団法人国際高等研究所

〒619-0225 京都府木津川市木津川台9丁目3番地

TEL:0774-73-4001 FAX:0774-73-4005

<http://www.ias.or.jp/>



〒619-0225 京都府木津川市木津川台9丁目3番地
TEL:0774-73-4000 FAX:0774-73-4005 <http://www.ias.or.jp/>